

## 解答

〔一〕 問一 ① 八〔月〕三十一〔日〕 ② 四〔年生〕 ③ 四階建て以上のアパート

問二 ア 1 イ 3

問三 2

問四 このまま夏休みがずっと続くことを願う気持

問五 4

問六 成長した未来の自分

問七 3

問八 2

問九 1

問十 4

問十一 ー ○ 2 × 3 × 4 × 5 × 6 ○

問十二 2

問十三 4

〔二〕 問一 ① 欲望の力で豊かになったが、人々は幸せではない。

② モノはたくさんないが、人々は幸せに生きている。

問二 A 人を前進させる大きな力になる点。 B 人を呪縛し、狂わせてしまう点。

問三 欲を捨てると不満がなくなると気づいたこと。

問四 最初 「足りない」 最後 れてくる。

問五 目標をおさえながら進めば、いずれ大きな目標にたどりつける点。

問六 人見知りの強い私だが、どうしても友だちになりたい人がいたので、意を決して話しかけた。幸い仲良くなれたが、今度はその人に他の人と話してほしくないと思うようになり、そういう私の思いを負担に感じた友だちは、私と距離を置き始めた。私と友だちをつなげてくれた「欲」が今は二人の仲をさこうとしている。「欲」に操られたくないと思うのも「欲」だと思えますます混乱してしまう。

〔三〕

〔四〕 A 2 B 3

6 祭典 6 おんぎ 7 とうじ 8 まい〔る〕

## 解説

〔一〕 出典は、小池昌代「九月の足音」。

問一 「秋が来る」という一文から文章は始まります。このような「いつ」を表すことばや「どこで」「だれが」「どうした」を表すことばに注意をしながら読み進めていくことで、場面の状況をつかみましょう。流星は「やるべき宿題は終わっ」た「最後の一日」、すなわち「夏休みはもう終わり」を迎え、「明日から学校に行かなければならない」状況にあります。「明日からまた、学校であるくしゃべってはいけない」や「泳ぎだって、四年生ともなれば二十メートルは泳げなければならなかった」「九月一日がくふみこんでくる」といった部分からは流星が学校に行きたがっていないことがうかがえます。この他、「夕方になってアパートにもどったとき」「ひとりでエレベーターに乗って、四階まであがっていく」などから流星の住んでいる家がわかります。

問二 問一で夏休みの終わりを迎えた流星が学校に行くのを嫌がっていることを確認しました。「明日からまた、学校である」が、「自分もまた、この標本の虫であつたらしく二度と、学校に行かないですむ」と考えている流星は、「菓子箱（標本箱）のなかの乾燥した蟬たちのように」、自分もこのまま「永遠の夏に、ピンでとめられ」、ずっとどこまっていたい、夏という時間（夏休み）が永遠に続いてほしいと願っています。

問三 「うるさいくらいによく鳴いていた」ミンミン蟬の声を聞いて「きのう真夜中に泣いていた、赤ん坊の泣き声」を思い出した流星は「この世はあらゆる泣き声でいっぱいだ」と「哲学者のよう」なことを口にします。「地球のあちでもう泣いている」ということは、すなわち「泣くということが生きることなのだろう」ということ。流星は「泣く（鳴く）」という行為に生命のエネルギーを感じています（へ↓4）。

問四 おじいさんに蟬を採ってもらいながら、流星は「また、いつか、このおじいさんに蟬を採ってもらうことがあるだろうか」とこれから先のことに思いをはせます。「おじいさんくらい、背がのびたら、もう、おじいさんにたよら

なくてもよくなるかもしれない」、そういう日がやがてくるのだろうか、流星は将来の自分の姿を漠然とイメージしています。

問七 生きること（生命のエネルギー）や自分の未来をイメージした流星の「空想は、先へ先へとのびて」いきます。

「おじいさんはいつか、死んでしまっだろう」「自分だって死が待っているだろう」「同じように見える」蟬だって、毎年、ちがう。生まれてきたものはいつか必ず死を迎える。すべての生き物は生と死の繰り返しから成る「大きな河の流れのなか」にいて、自分もまた例外ではないのだと流星は考えています（へ↓3）。

問八 命あるものは必ず死を迎える。すべてのものに終わりがある。夏もまた、間もなく終わりを告げようとしている。流星は自分を含めたすべてに刹那的な（短い時間で終わってしまう）印象を抱いたのでしょうか。そうすることで夏休みが続いていくように思ったのか、あるいは、過ぎゆく夏を惜しんでいたのか。流星は日が暮れるまでひたすら蟬を採り続けました（へ↓2）。

問九・十 アパートにもどった流星は「女の子」に出会います。「いつもの制服」ではない彼女を流星は「かわいいな」と思いましたが、それも束の間。「一瞬見つめ」あうと、女の子は「かけ出して」しまいます。夏休みは終わり、おじいさんとも会えなくなり、かわいい女の子は逃げていく……。流星が好むものはみんな彼から離れていってしまうのでしょうか。「生きている蟬」よりも「箱のなかの死んだやつ」のほうが、逆にいまにも飛び立ちそうに見えるほど、流星にとって蟬は「生命」を強く感じさせる「美しいもの」です（問十↓4）。女の子にほのかな好意を抱いた流星は自分の美しい蟬を「見せてやりたい」と思いましたが、残念ながら美しい蝶（女の子）は流星の前から飛び立ち、流星の思いは届きませんでした（問九↓）。

問十一 流星はおじいさんから「生きている虫を、すぐに殺して、標本にする方法」と、そのために使う「人も殺せるような薬」について教わります。美しい標本ができるのはうれしいことですが（へ↓○）、「ただ標本を作りたい」だけの流星にとって「劇薬」はそれを「買うことを考えただけでも、悪いことをするような気持ち」になってしまい、名前を「唱える」だけで緊張と興奮で「胸がどきどき」してしまう、やっかいなものでした（へ↓○）。

問十二・十三「自分よ、（標本の）虫になれ」と念じるほど学校に行くことを嫌がっていた流星でしたが、ついに運命の「九月一日」が有無を言わさぬ強さをもって訪れてきました（問十二↓2）。「わーっと泣きたかった」流星でしたが、「昨日は生きていた蟬がおお向けになって死んでいる」のを見た後、「あらゆるところに変化は訪れる」という「哲学」的なことばと「劇薬」の名前を口にする、静かに眠りの中に引き込まれていきます。生命（時）を「今」という瞬間に閉じ込めてしまう「劇薬」は、生と死の繰り返しから成る「大きな河の流れ」の前で抗うこともできずに立ち尽くしていた流星に安らぎを与えてくれるものだったのかもしれませんが（問十三↓4）。

「二」 出典は、斎藤茂太「いい言葉は、いい人生をつくる」。

問一・二 「戦後の日本」は「より高く、より大きく、より豊かに、と望みの器を大きく」することで「豊かな国」になったものの、筆者は「いまの日本に理想の国の姿を見ること」はできないと考えています。「人が幸せに生きていくためには、それほどたくさんのモノは必要ない」「ほとんどモノのない暮らしでも、家族の愛情と子どもたちの澄んだひとみ、みんなのくつたくなのない笑顔」があふれている海外の国（へ↓問一・②）を見れば、「欲望」を「起爆力」「推進力」として作り上げた日本が精神的に貧しい、不幸せな国である（へ↓問二・①）ことが浮き彫りにされると筆者は考えています。「欲」は「人を前進させる大きな力」（へ↓問二・A）がある一方で、「人を呪縛し、人を狂わすこともある」（へ↓問二・B）という二面性を持っています。

問三・四 今でこそ「欲」とうまく付き合っている筆者ですが、「若いときにはそれなりの欲があり」、欲が満たされなければ「その分、枯渇感を覚える」こともあったようです。ところが、一切の「欲」を捨て去らなければならぬ「戦争」を体験したことで、筆者は「あまりに高い望みをもちすぎる」からこそ「不満が大きくなる」ことに気づきます。「欲」を抑えれば『足りない』という焦燥感や不満」と縁遠くなり、「ゆとりや柔軟性が生まれてくる」（へ↓問四）。欲に目がくらんでいると、このような簡単な理屈にも気づかなくなってしまうのでしょうか（へ↓問三）。

問五 「高山に登るとき」は「高度順化が非常に大切」です。「最初からいちばん高い地点を目ざそうものなら高山病にやられ、ひどい場合は生命にもかかわる」から、まずは「低いところから」はじめ、「じょじょに高いところへと高度順化をして体をならしながら」高い「頂上をめざしていく」ことが山を安全、確実に登る唯一の方法です。筆者は「人生」もまた同じようなものだと考えています。最初は目標の「六十パーセントのところで満足して」おいて、いざれ「自然にその少し上に登りたく」なったら、「少し高度を上げる」。そうやって、少しずつ少しずつ高い目標に向かって進んでいけば、やがては高い頂上（目標）へとたどりつくことができる。筆者は「六十パーセントや八十パーセントでこと足れり」というような生き方」であっても、実はちゃんと「大きな目標は達成でき」ると考えています。

問六 欲深い言動で失敗した例はたくさん挙がりそうですが、欲を抱いたことがプラスに働いた例はなかなか難しそうです。しかも、両者を結んで「欲」についての考えをまとめるとなると至難の業でしょう。大きなこと、劇的な展開をまとめようとせず、身近で起こったささいな出来事を中心に具体例を考え、「欲」というものについて肯定的にとらえているのか、否定的なイメージを持っているのかという、自分の見解について明らかにします。